

形容詞「ものし」の語義

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 光浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1422

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



形容詞「ものし」の語義

吉 田 光 浩

はじめに

弘徽殿には、久しく上の御局にも参う上りたまはず、月のおもしろきに、夜更くるまで遊びをそしたまふなる。(帝へ)
いとすさまじうものしと聞こしめす。
(源氏物語・桐壺)

右は、桐壺更衣が亡くなった後の、弘徽殿女御の様子と、それに対する桐壺帝の心情を記した部分である。ここでは、嘆き悲しむ帝の心情を逆撫なでするかのような女御の行為が描かれており、それに対する帝の心情が「すさまじうものし」と表現されている。ここに用いられている形容詞「ものし」は、この例のように「面白くない・不愉快である」といった不快な感情を表す意味で多く用いられる語であるが、具体的なことについては、不明の点が多い。

ここでは、このような「ものし」の語義について、とりわけ中古の例を中心に考察しておくことにする。なお、本文中に示した用例は、本稿末の参考文献中の資料を用いたが、表記に関しては、読解の便を考慮して適宜改めたところがある。

「ものし」は、上代には例を見ることができず、中古以降に使用されるようになった語のようである。その使用される資料もきわめて限定的であり、中世以前の古辞書にはその記述を見いだすことができず、管見の限りでは訓点資料にも例が見られない。また、『今昔物語集』『古本説話集』『十訓抄』などの説話にも使用されておらず、和歌にも用いられていない。基本的には、和文資料の散文のなかに見いだされる語であるが、その実態については、ほとんど明らかにされていない。

現行の古語辞典、あるいは注釈書の記述を見ると、「ものし」の語幹「もの」については、『岩波古語辞典』に「モノは魔物の意。また何かよくわからないが存在していることは確かな対象の意」とあり、また、『日本古典文学大系宇津保物語』補注には、「もの」が語幹となって形容詞をなす場合について「漠然ながら注意すべき事象が存在する状態。物し。物々し」(四九二頁・補注二二五)とある。

語義としては、『日本国語大辞典』(小学館)に、①「物事の様子がいとわしい。どことなく気にさわる。不快である」意と②「不気味で怪しい。不吉である」意が示されている。また、『岩波古語辞典』も、①「不気味である。あやしい感じがする」、②「何か心に抵抗を感じさせるものがある。なんとなくひっかかって不愉快である」とあり、『日国』とほぼ同じ内容の記述が見られる。一方、『古語大辞典』(小学館)では、「不快である。見苦しい。嫌だ」と記述されており、『日国』・『岩波古語』に見られる「不気味だ」「怪しい」「不吉だ(『日国』のみ)」に相当する意味が記載されており、かわりに、外見的な評価を示す「見苦しい」意を挙げている。(尚、『角川古語大辞典』は、本稿執筆時点で、マ行以降未刊) 現行の辞書に、このような記述内容の相違が生じた原因のひとつは、以下の『大和物語』と『蜻蛉日記』の用例処理に

あるものと推察される。

人ありともみえぬ御廉のうちより、薄色の衣濃き衣うへにきて、たけだちいとよきほどなる人の、髪、たけばかりならんと見ゆるが、「よもぎ生ひて荒れたるやどを鶯の人来と鳴くや誰とかまたん」とひとりこつ。少将、「来たれども言ひしなれば鶯の君に告げよと教へてぞ鳴く」と声をかしくていへば、女驚きて人もなしと思ひつるに物しきさまをみえぬることと思ひて物もいはずなりぬ

(大和物語・一七三)

ここに見られる「物しきさまをみえぬること」の例については、日本古典文学大系本頭注に「見苦しい様を見られてしまったことよ」とあり、「ものし」の解釈に「見苦しい」を用いている。『大和物語』の古注釈には、「みくるしきをと云心也」(『大和物語鈔』)、また、「見くるしくかろくしきさまを女のはちおもへる也」(『大和物語拾穂抄』)とあり、古注釈の段階から、この箇所の「ものし」の解釈として、外見的な不体裁・みつももない様を表す「見苦し」を用いるものが多い。おそらく日本古典文学大系本頭注もこれら古注釈の記述に倣うものと思われ、解釈自体には大きな揺れはなさそうである。『古語大辞典』では、この「大和物語」の例を挙げて、「見苦しい」意を「ものし」の語義に採用している。しかしながら、明らかに「ものし」に「見苦しい」意が当てはまる例は、これ以外に見当たらず、この意を語義として認めることが適切か否か、なお疑問の残るところである。

一方、『日本国語大辞典』では、この例を、「物事の様子がいとわしい。どことなく気にさわる。不快である」意の用例として挙げているが、ここは、「物しきさまをみえぬること」とあるように、不快な感情を表すものではなく外見的な評価に関わる表現であり、適切な用例とは言い難い(なお、『岩波古語辞典』では、この例は、採用されていない)。

また、『日本国語大辞典』『岩波古語辞典』では、「不気味だ・あやしい・(不吉だ)『日国』のみ」の意が語義として採用されているが、いずれの辞書も、その用例として、次の『蜻蛉日記』の例を挙げてゐる。

五月に、帝の御服ぬぎにまかで給ふに、さきのごと、こなたになどあるを、「夢にものしく見えし」などいひて、あ

なたにまで給へり。

(蜻蛉日記・上・安和元年五月)

貞観殿登子と道綱母との歌の贈答の部分である。この「夢にもしく見えし」の解釈について、『新潮日本古典集成蜻蛉日記』には「不吉な夢を見たので」と記されており、同様に解する注釈も多いが、『蜻蛉日記講義』に『ものし』は厭うふべきさまをいふ。夢見が悪かつたなど云つて」とあり、必ずしも「不吉だ」の意を用いない注釈も見られる。「ものし」は、上記(大系本宇津保物語補注)のように、「漠然ながら注意すべき事象が存在する状態」が原義と考えられており、また、上代の「もの」には「鬼神、魔物、不思議な力を持った靈威」(『時代別国語大辞典上代編』)の意があり、それと関連して「不吉だ」の意が生じたものと思われるのであるが、中古にはこの例以外に「不気味だ・あやしい・不吉だ」の意が、十分に当てはまるものが見当たらず、疑問の残るところである。

次に、上記辞書の記述内容のいずれにも当てはまらない例について検討しておく。『大和物語』『蜻蛉日記』と、ほぼ同じ頃に成立したものと推定される『多武峰少将物語』には、以下のような例が認められる。

本よりかかる御心ありけれど、父おとどおはしけるほどは制しきこえ給ひければ、え思したたざりけれど、失せ給ひてのち、腹々の君たちは、みな心とおはしませば、おとどおはしませねども、ことにもものしき事もなし。この齋宮の御腹の女君は、まだともかくもなく、おとどのかしづき給ひしにかかりておはせしに、さもあらねば、ただこの御せうとたちを睦ましきものに語らひきこえ給ひて、

(多武峰少将物語・少将出家)

右は、この物語の冒頭の一文である。高光少将は、以前から出家したいという意志があったが、父師輔公の存命中は禁じられていたので決心することができなかった。師輔の没後、異腹の子たちは、自分の考えで何事も処理できたので、「ことにものしき事もなし」であるとする文である。形式的にはここで文が終止しているが、文意としては、この後に、「しかし、同腹の姫君(愛宮)は、父大臣の庇護下にあったので特に困り、高光少将たちを頼りとしている」とする文が続いて内容的に完結するものである。ここに用いられた「ものし」は、上記辞書に見られる「不気味だ・あやしい・不吉だ」

あるいは「不快だ・氣に障る・抵抗を感じる」などの意が、いずれも当てはまらない。松原一義『多武峰少将物語注解』（平成三・桜楓社）では、このところを「特にこれと違って困ることもない」と解釈されている。全体の文意としてはそれで理解可能となるが、「ものし」が「困る」意で解釈されており、やはり、これについても、「ものし」の用例のなかに類するものが見当たらず、上記二例と同様に疑問が残るものである。

以上、中古に見られる「ものし」の用例の中で、現行の辞書の記述を巡って問題となる『大和物語』『蜻蛉日記』『多武峰少将物語』の例について若干の検討を加えた。それぞれ「見苦しい」「不吉だ」「困る」などの解釈が各々の注釈書に見られたが、個々の用例には、おのおのの文脈から生じる解釈があり、それらの注釈は、いずれも妥当と思われるものである。しかしながら、「ものし」自体の語義として、これらを捉えるには、あまりにも統一性を欠いている。しかも、それぞれに、明らかにその意として解釈できる類例が、他に多く見られるわけではなく、むしろ、いずれも孤例と考えるべきもののように思われるのである。したがって、「ものし」の語義を考察する場合には、これらの注釈をどのように捉えるべきか、さらに検討しておく必要がある。

一一

上記のそれぞれの用例に関する疑問を解く鍵は、次の『源氏物語』の例にあるように思われる。

（少将の尼）「あなあさましや。などかくあうなきわざはせさせたまふ。上（妹尼）、帰りおはしましては、いかなることをのたまはせむ」と言へど、かばかりにしそめつるを、言ひ乱るるものしと思ひて、僧都諫めたまへば、寄りてもえ妨げず。
（源氏物語・手習）

浮舟が出家する場面である。急いで止めに入った少将の尼であったが、剃髪の儀はすでに始められており、僧都は「言

ひ乱るるものし」と思つて、それを制し、儀式を強行する。日本古典文学全集本には、「とやかく言つて当人の気持ち
を迷わせるのもおもしろくない」と解釈されているが、ここに見られる「おもしろくない」は、不快の感情を表すものでは
なく、理性的に儀式の中断を良くないこととして表現するものと思われる。つまり、感情的意味ではなく物事の良し悪
しをめぐる価値判断、すなわち評価の意味として捉えるべき例と思われる。『源氏物語』には、この例も含めて三十一例
の「ものし」が用いられているが、このような例は、ここに示した一例のみで、他はおおむね不快感情の意味として理解
されるものである。

ところが『うつほ物語』には、これに類する例が、以下のようにいくつか見いだされる。

(仲忠)「一方にのみおはしますはいとものしきやうに侍り。こなたに十日、宮の御方に十日、今十日を三所におはし
まさせん」と聞え給へば、
(うつほ物語・楼上・上)

自分の母、北の方の所ばかり過ごしている父親兼雅に対して、息子の仲忠が意見をする場面である。大系頭注には、
「いとものしきやうなり」について、「目立っていきません」と解しているが、ここは、父親に対する息子の忠告が述べ
られているところであるため、「芳しくない」「よろしくない」の意と解することができる。

人の婿といふものは、若き人などをば、本家のいたはりなどして、たつるをこそはおもしろきことにはすれ、いたは
りどころなくて、本家のはづかしくものせらるるなんものしき。
(うつほ物語・初秋)

ここは、将来性のある人を婿とする場合に、本家が世話もせず、恥ずべき待遇をとるのはよくないことであると、正頼が
一般論を述べた部分である。ここに用いられた「ものしき」は、「おもしろき」と対照させて用いられているのであるが、
不快や不吉・不気味の意では、解釈できない。ここは、むしろ、一般的な評価を表す「よくない」などの意が適切であ
る。大系頭注に、「感心できない」と注釈されているのは、そのあたりを考慮したものと思われる。

(仲忠)「家来の近江守は」いとよく叶ひ侍る人なれば、此度は右大臣殿ものしと思したりつれど、(私へ仲忠)が

強ひて申しなし侍りぬるなり。さても身にはすぎ侍る也」

(うつつは物語・蔵開・下)

仲忠が、家臣の近江守任官について、自分が右大臣正頼にとりなしたことを、父兼雅に話す一文である。右大臣正頼は、そのことに積極的ではなかったが、仲忠の言葉を受け入れて、異を唱えなかったわけである。このところ、「右大臣ものし」と思したりつれど」に見える「ものし」は、不気味・不吉の意では理解不能となり、また、不快の意では違和感の残るところである。日本古典全書本頭注には、「正頼は不賛成でしたが」とあり、日本古典文学大系本頭注でも同様に解している。ここは、身に過ぎた任官を良くないこととして賛成できない意を表している。

このような『うつつは物語』の「ものし」の例は、「不気味だ・あやしい・不吉である」の意では解釈できず、また、感情表現としての不快感を表現するものでもない。理性的にそれぞれの事柄を「よくない」こととして評価的に捉える例であることが理解される。

同様に『落窪物語』にもこれに類すると思われる例が認められる。

さて、人打ちけるは、それぞなめげにいひたてりしを、にくさに、冠をなんうち落として、男ども引きふれ侍りし。
おのづから少将、兵衛佐も見侍りき。いと、人物しといふばかりの事もし侍らざりき。

(落窪物語・巻二)

継子いじめの報復事件について、父右大臣から問いただされた折の、衛門督の言葉である。『日本古典文学大系落窪物語』頭注には、「人が大そう不都合だということもしませんでした」と解釈されている。この場合の「ものし」は、他人が見ていて眉をひそめるような様を表すものと思われるが、表現の重点は、不快な感情を表すところにあるのではなく、第三者から見て、理性的に「良くない・不都合な」行為であると評価の意味を表すところにあるものと考えられる。

以上のように、『源氏物語』『うつつは物語』『落窪物語』に見られる「ものし」の例には、「良くない」「不都合だ」といった評価の意味を表すものが幾つか認められる。この意味については、従来の辞書類には記載されていないが、上記の諸例により、明らかに「ものし」の語義として認めざるを得ないようである。

このような評価の意味を表す例を考慮に入れて、先の『大和物語』『蜻蛉日記』『多武峰少将物語』の三例の解釈について、再度検討を加えると、いずれも、「良くない」「不都合だ」という評価の意味により、解釈が可能であるものと考えられる。すなわち、『大和物語』の「物しきさまをみえぬること」は、「良くないところ（不都合なところ）を見られてしまったことよ」の意で解釈可能であり、『蜻蛉日記』の「夢にものしく見えし」については、「夢に良くないことが見えたので」あるいは「夢に（そちらへ行くことが）不都合であると思えたので」の意とすることができ。また、『多武峰少将物語』に見られる、「おととおはしまさねども、ことにものしき事もなし」については、「父大臣はいらっしゃらないが、特に不都合なこともない」と解することができる。したがって、上記の注釈書に見られた「見苦しい」「不吉だ」「困る」といったそれぞれの解釈は、「注釈」という、文脈に即した解釈が要求される場合のものとして妥当であるが、それらは「ものし」に見られる、「良くない」「不都合だ」といった評価の意味が個別の文脈に応じて表されたものと考えられることができる。

また、このような評価の意味は、「ものし」の語源を名詞「もの」に求める従来の語源説に、大筋において抵触するものではない。すなわち、「ものし」は、名詞「物」の形容詞化として、従来から説かれており、「何かが存在する状態」を表すことが原義であると考えられている。その存在する何かが障りとなって、すっきりしない状態を情意的に捉えたものが「不愉快だ・面白くない」といった不快な感情を表す語義であると推定される。これと同様に、そのような何物かが存在しているですっきりしない状態を評価的側面から捉え、「不都合だ・良くない」といった意が生じたのではないかと思われる。

ただし、従来の語源説では、上代の名詞「ものし」に「鬼神、魔物、不思議な力を持った靈威」の意があるところから「不気味である・あやしい・不吉だ」の意が「ものし」に認められている。本稿も、名詞「ものし」を「ものし」の源と考える以上、この意が含まれることを完全に否定するものではない。しかしながら、上記のように、評価的意味が「ものし」にあり、『蜻蛉日記』の一例についてもそれとして考えられる以上、他に明らかに「不気味だ・あやしい・不吉である」意に該当する例が見当たらない限り、「ものし」の語義としてこれらの意を認めることは、現段階において疑問とせざるを得ないのである。

おわりに

「ものし」の用例は、『落窪物語』『蜻蛉日記』の頃から、すでに不快な感情を表すものに大きく偏る傾向が認められる。したがって、本来は、そのような例についても触れるべきであったが、ここでは、現行の辞書の意味記述の上で問題となる数例に絞って考察を加えることとした。その結果、①「ものし」には、現行の辞書では採用されていないが、「良くない」「不都合だ」といった評価的意味が『落窪物語』『うつほ物語』『源氏物語』などの諸例から認められること。

②そして、そこから、『多武峰少将物語』『大和物語』『蜻蛉日記』の諸例の解釈が統一的に可能になることについて検討した。

なお、中古後期以降についても、「ものし」の用例は、ほとんどが不快な感情を表すものとして用いられたようであるが、評価的意味を表す例としては、中世の和文資料、『竹むぎが記』の資名・房光出家の箇所、「文をだにと思ふかたがたあれど、さやうに書き散らしつつ散りばはむむいともものしかるべし」とあり、それと思われる例が認められる。

*付記 本稿には、拙稿『『ものし』について—感情と評価の表現』(国文学「解釈と鑑賞」別冊『源氏物語の鑑賞と基礎知識No.5若紫』平成一一・三・至文堂)に述べたものと、行論の都合上、一部重複させた部分がある。

(参考文献)

- 阿部秋夫・秋山虔・今井源衛編『日本古典文学全集源氏物語』昭和四五・小学館
 阿部俊子・今井源衛『日本古典文学大系大和物語』昭和三二・岩波書店
 佐伯梅友・伊牟田経久編『かげろふ日記総索引』昭和三八・風間書房
 松原一義『多武峰少将物語注解』平成三年・桜楓社
 河野多麻校注『日本古典文学大系宇津保物語』昭和三四・岩波書店
 松尾聡・寺本直彦校注『日本古典文学大系落窪物語』昭和三二・岩波書店
 渡辺静子校注『竹むぎが記(上)』昭五〇・笠間書院